

研究者人生に方向転換を迫られたら：

海外留学からの脱出・中断→新たなやり甲斐を見出すまで

りんくう総合医療センター 産婦人科 古谷毅一郎

Physician-scientist の夢を追い留学→新型コロナパンデミックによる方向転換

私は現在、りんくう総合医療センター産婦人科で、「多職種連携による母体救命」・「有事下での周産期管理」をテーマに臨床/研究活動を行っています。しかし、元々は Physician-scientist として活動する夢を持っていました。大阪大学大学院で博士号取得後、英国 Nottingham 大学獣医学部に研究留学し、多様な動物種の妊娠/分娩生理を好きなだけ学び、充実した日々を送っていました。しかし好事魔多し。2020 年 3 月、新型コロナで英国全土がロックダウンし、留学生は全員大学寮から締め出され、日本へ脱出する羽目になりました。帰国したものの、進めていた基礎実験は暗礁に乗り上げ、私の研究者人生は方向転換を迫られました。そんなとき、医局から現所属先を紹介して頂き、現在に至ります。

新たなやり甲斐—新型コロナ感染妊婦の経膈分娩管理—

現職場に赴任後は、縁あって新型コロナ感染妊婦の母体搬送・周産期管理の構築/運用を任せられ、多くの先生方・助産師さんの協力の下、感染隔離中の経膈分娩を本邦に先駆けて実施しました（右図）。結果、多くの感染妊婦搬送を応需し、隔離中の経膈分娩も多数管理しました。当科のノウハウが他施設に浸透し、応需可能施設数増加に繋がりました。「コロナから逃げてきたのに、コロナ最前線で診療をしている」自分に因果なものを感じましたが、この 3 年間は、心血を注いだ基礎研究が宙に浮き、将来の目標を失いか



COVID-19 感染隔離妊婦の経膈分娩対応（筆者）

けていた私にとって、新しいやり甲斐・視点を与えてくれるものでした。パンデミックを経て、有事下での産科医療に必要なことは、他科との「横のつながり」、「産科医療の特殊性」に対する外部からの理解、そして、「火事場に手を突っ込む」心意気、だと痛感しました。

苦しい経験を、アカデミックな形で残す

当院は総合病院でありながら”横のつながり”が強く、多職種連携での母体救命/妊産婦管理を実施可能な医療風土があり、この経験を他施設でも役立つ「ノウハウ」として、論文や学会発表というアカデミックな形に残す重要性に気付きました。上司の計らいで、アカデミア活動の大半を任せていただき、学会・論文報告を多数行いました。この活動は結果的に専攻医のアカデミア教育にもなり、これまでの研究スキルを発揮できる新たなライフワークとなりました。複数の先生を同時に教えるのは根気が要りますが、論文の作法などアカデミアの基本的ルールを Side by side で伝え、「何度も一緒に推敲し、最終的に自分の力で書いてもらう」スタンスで論文発表を続けています。結果、私を含め、多くの先生方が学会・論文賞を多数受賞され、大活躍してくれています（業績・受賞歴：<https://researchmap.jp/aaaaaaaaaaaaaaaa>）。基礎実験はできませんが、別のスタイルで Physician-scientist の活動を続けることができ、若い先生方が

喜ぶ姿を見るたびに、指導者冥利に尽きる日々です。また、「有事における周産期管理」を継承するため、救命診療科・感染症領域の学会でも発信を続けています。

最後に

パンデミックによって研究者人生が大きく狂い、異国の地で命の危険と隣り合わせの事態を経験しました。しかし、自分の得意分野/研究スキルを発揮できる環境に巡り会い、新たなやり甲斐・目標を見出し走り続けることができました。気付けば英国脱出後 6 年が経過、昨年からは副部長を拝命し、臨床・研究・教育に邁進する毎日です。つたない経験ですが、「人生設計が突然閉ざされた事態」に対する私なりの Take-home message を記します。みなさまのご参考になれば、幸いです。

- 1) 人生設計を転換せざるをえない事態は突然起こりうる
- 2) これまで培った経験・努力を「スキル」として発揮できる環境は必ずある
- 3) 2) の環境に巡り会えたら、とにかく走り続けてみる
- 4) 専門以外の分野にも目を向け、フィールドを広げてみる
- 5) 有事においては、自身と家族の安全を最優先に

〔著者略歴〕 古谷 毅一郎（ふるや きいちろう）

略歴

2007 年：金沢医科大学 医学部医学科 卒業

2009 年：大阪大学産婦人科入局 同附属病院・大阪労災病院 産婦人科専攻医

2013 年：大阪大学大学院医学系研究科 入学 旧大阪厚生年金病院 医長（院生兼任）

2018 年：大阪大学大学院医学系研究科 産婦人科学 助教

2019 年：英国 University of Nottingham, School of Biosciences へ研究留学

2020 年：新型コロナロックダウンにより、英国から脱出

りんくう総合医療センター 産婦人科で臨床復帰 現在副部長

資格

日本産科婦人科学会 産婦人科専門医・指導医

日本周産期・新生児医学会 周産期専門医

日本がん治療認定医機構 がん治療認定医

日本抗加齢医学会専門医

日本妊娠高血圧学会 妊娠高血圧ヘルスケアプロバイダー

医学博士（大阪大学）

臨床研修指導医

J-MELS ベーシックコース インストラクター

J-MELS アドバンスコース インストラクター

J-MELS 硬膜外鎮痛急変対応コース インストラクター

周産期医療 # パンデミック # Physician-scientist # 発想転換

～DEI 推進委員会より～

逆境がひらいた、もうひとつのキャリア — Career Adaptability —

米国の心理学者 Savickas が提唱したキャリア構築理論は、変化に適応する力を関心・統制・好奇心・自信という 4 つの構えで説明します(Savickas, 2005)。この枠組みは 13 カ国の国際調査でも実証されており(Savickas & Porfeli, 2012)、文化を超えて通用する視点です。古谷先生のエッセイには、まさにこの 4 つが息づいています。留学の中断という不可抗力を前にしても未来を見失わず、与えられた状況を自らを活かす場に変え、有事下の周産期管理という新しい視点を掘り起こし、その経験を後進に伝え自信へとつなげていく—危機に適応しながらキャリアを再構築していく軌跡です。

「培った経験を『スキル』として発揮できる環境は必ずある」—この一言には、変化に適応し、しなやかに歩みを重ねてきた矜持が凝縮されています。非直線的なキャリアの豊かさを感じさせるこのエッセイから、みなさまは何を受け取られましたか？

責任編集
DEI 推進委員会